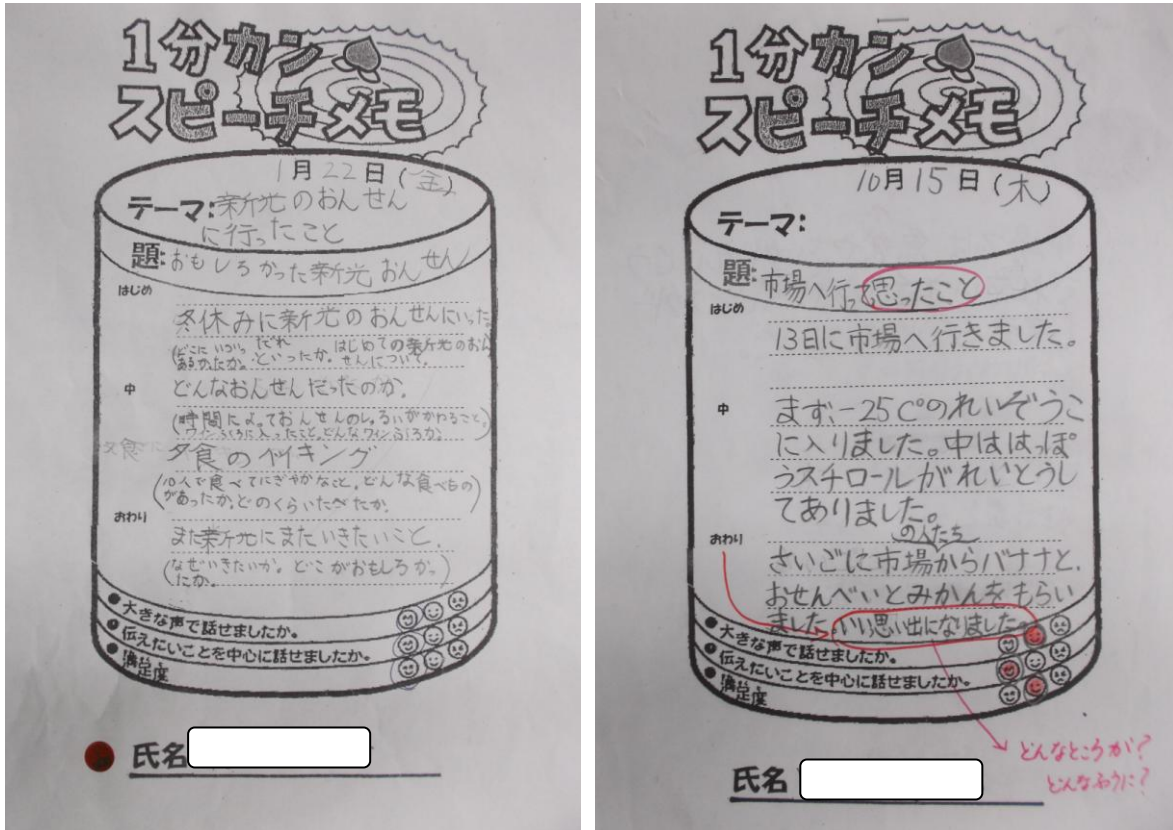


1. 実践内容（中学年ブロック）

◎日常の取り組み

【朝のスピーチ活動】

朝の会の中で日直が行う、一分間のスピーチ活動。事前にスピーチメモを作成させるが、その際に「はじめ・中・終わり」の組み立てを意識させることで、文章の構成に慣れさせることを目的として行ってきた。

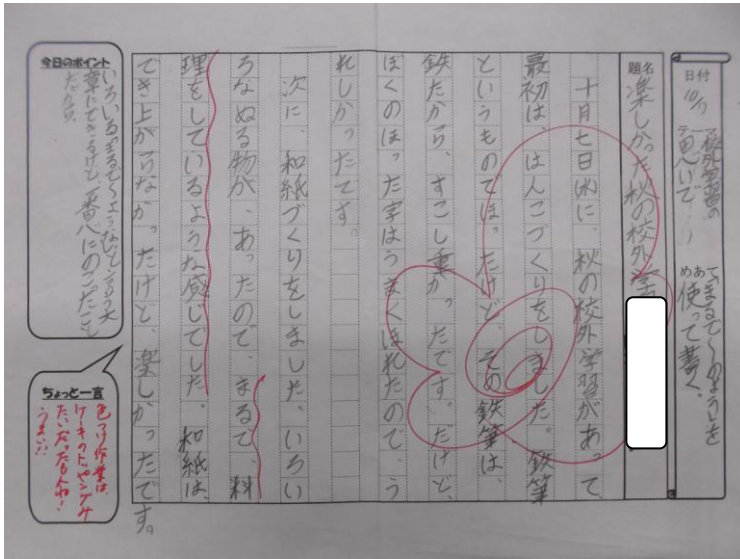


【スピーチメモ】

一分間という長い時間スピーチを続けることは、児童にとってとても難しく、取り組み開始当初は30秒もたせることが精一杯という児童がほとんどだった。また、内容についても、話したいことをただ羅列していくことが多く、組み立てに意識を向けられている児童は少なかった。しかし、取り組みを継続していくことで、聞き手を引き込む話の組み立て方を身につけたほか、発表の段階においてもメモにはない内容を肉付けするなど、慣れによる高度な表現を実践できる児童も増えてきている。

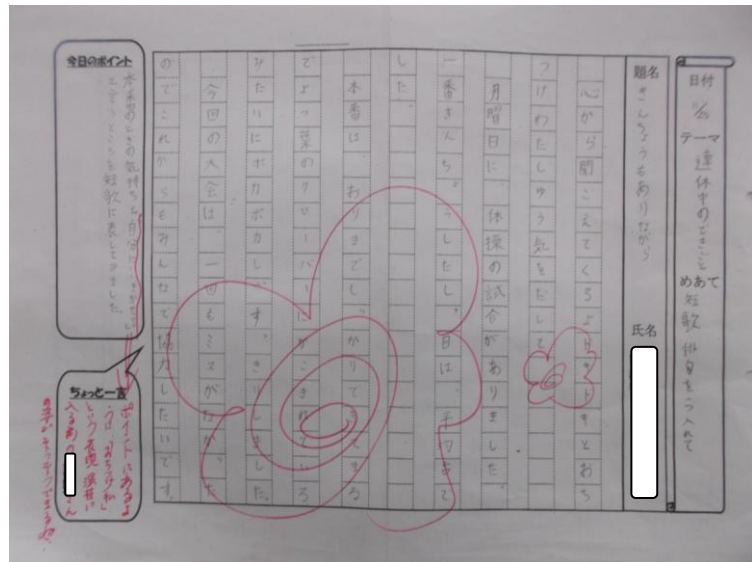
【週末作文】

毎週末、テーマや文中で使用する表現技法などを指定し、それにあった作文を書く活動。効果的な表現技法への慣れや身近なところから題材を探す力をつけること、また書くことへの抵抗をなくすことなどを目的として行ってきた。



原稿用紙は、よく使用される400字づめのものを使用せず、ブロック独自で作った180字づめの原稿用紙を使用した。これは、書くことへの苦手意識をもつ児童でも、簡単に書くことができ、まずは「できた」という感覚を、喜びとして感じてほしいという教師側の願いから作成したものである。

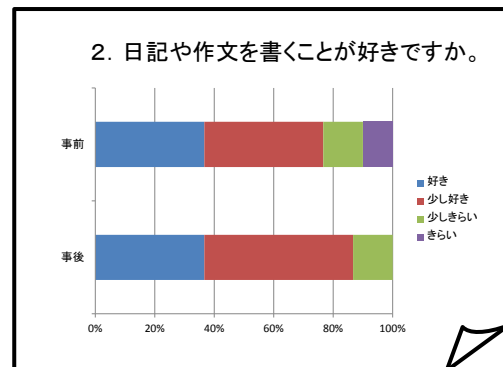
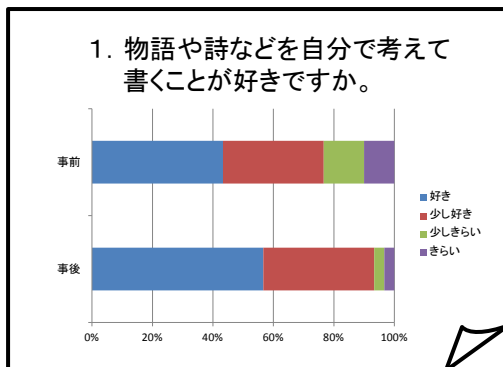
また、毎回テーマや使用する表現技法を設定することで、楽しみながらスキルアップができるようにし、書き終えた後、「今日のポイント」として自分の作文を振り返ることで、表現技法を自分のものにできるようにした。あまり欲張らず、同じ技法を繰り返し使用させることで、比喻を使って表現したり、接続詞を適切に使って表現したりするなど、効果的な表現ができるようになってきた。



【週末作文用紙】

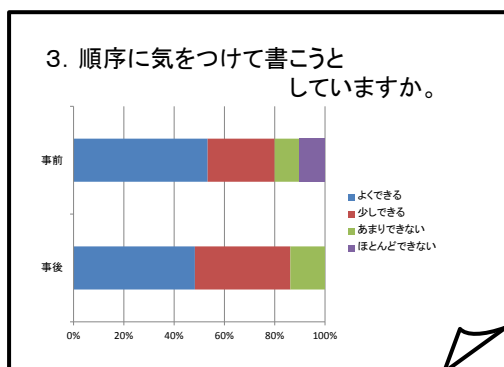
2. アンケートより

◎関心・意欲面



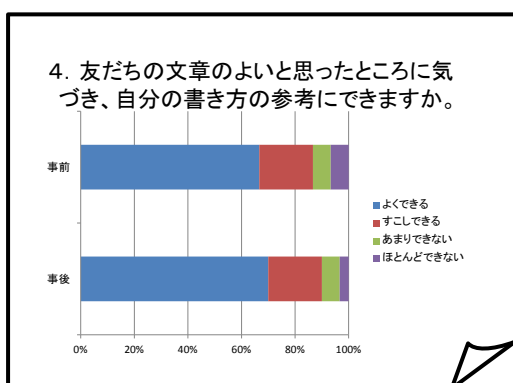
本研究取り組み前には、書くことに強い抵抗をもつ児童が全体の23%を占めていたが、取り組み後のアンケートでは、10%と半分以下に減少していた。これは、字数を制限した特別な原稿用紙を使用したことで、スムーズに“書けた！”という経験が積めたこと、またテーマや使用する表現技法に面白みをもたせたことで、書くことを楽しいと感じることのできた児童が多かったからではないかと考えられる。

◎記述面



今回の研究授業では、構成に焦点を当てて取り上げた。授業前には構成に意識を向けられていない児童が20%いたのに対し、授業後には10%と半減した。このことから、授業で行った図鑑作りを通し、多くの児童が書く内容の順序を工夫することで、効果的な表現になると気づくことができたと考えられる。

◎他者との交流面



今回の単元では、上手な表現ができていた児童を取り上げて紹介したり、成果物の交流を行ったりしたもの、文章作成時における児童同士の深い交流は取り入れなかった。そのため、友だちの良い点を意識的に取り入れようという児童の変容がみられなかった。これを一つの課題とし、以後の学習単元では、交流や自己との比較など見る目も育てられるよう仕組んでいきたい。

3. 成果と課題

<成果>

- ・今回の単元では、第一次において最終的な成果物を提示した。それにより児童のなかにははっきりとしたゴールが見え、目標と見通しをもって活動をすることができていた。
- ・国語科の学習で、取材・構成・記述の仕方を学んだり、週末作文の取り組みを続けたりしたことで、書くことへの抵抗が少なくなっていた。
- ・スピーチメモを使い構成に力を入れたため、「はじめ・中・終わり」を意識して話すことができるようになってきた。また、取り組みに慣れてきた年度末には、メモを参考に肉付けしながら話すなど、高い表現力を身につけることができた児童もみられた。

<課題>

- ・「書くこと」の学習活動は指導に時間がかかることが壁となる。時数の確保が困難で、一部の単元でしかじっくりと取り組む時間をつくってあげられないこと、また資料の準備・選択などにおいても、十分な環境を整えてあげられるかどうか課題となる。
- ・本時の授業の中では、交流の場を設けることができなかった。自らの学びを仲間にも伝えていくという機会を、普段から授業の中で仕組んでいきたい。